

【研究ノート】

地域資源を用いた市民の博物館活動に関する考察

— 東京都墨田区「小さな博物館」運動を事例として —

A study on the inhabitants' museum activities using regional resources

— In case study of the Sumida project —

鳥井 幸恵[※]

Yukie TORII

中村 攻^{※※}

Osamu NAKAMURA

斉藤 雪彦^{※※}

Yukihiko SAITO

Abstract:

In recent years, consciousness to the activities in which inhabitants participate in their town voluntarily and sustainedly is increasing. The purpose of this study is to clarify the problems and questions among the educational activities taking up regional resources by researching the state of how the museum activities using regional resources spread out, and that of the educational activities by inhabitants associated with the museum. The state of how the museum activities spread out (the change in location or how it started) was clarified from the investigations of maps or historical documents. The contents of the educational activities and problems of those came to light by interviewees.

1. はじめに

近年、日本国内において、地域の資源を住民自らがまちあるき・ワークショップ等によって再認識し、保全活動等を行い、それらを観光資源として管理・活用しながら地域活性化を行っている地域も少なくない。その中でも、地域全体を博物館ととらえ、地域に点在する地域資源をネットワーク化し、住民主体による地域資源の発掘・管理・運営を行う博物館活動を行っている地域も各地でみられるようになった。

博物館活動の基本条件⁽¹⁾としては、以下の「1：物を調査し研究する機能」「2：物を収集し保管する機能」「3：物を公開し教育する機能」を満たすものであると考えられ、本研究で述べる博物館活動とは、「調査・研究」「収集・保存」「展示・教育」という博物館の理念のもとで組織化されたものとして定義する。このような博物館活動を通して、住民が自ら所有する資源を「調査研究」をし、「収集・保全」活動をし、それらを対外的に展示活動や技術体験活動等を行うこと（「展示企画」）を通じて、地域学習（「教育普及」）を行うことにもなる。この場合においては、教え、教えられるという二者対立的な学習活動でなく、地域資源を活用し一体的なアプローチが考えられる。地域に点在する有形無形の資源の所有者である住民に対し、そのような博物館活動を促すことは、自分たちの財産が地域にとって価値あるものとして認識していくことにつながる。それによって住民の地域及び地域資源に対する誇りが生じ、「自ら持続してまちに関わっていく」という意識が生じてくると考えられる。また、博物館活動を用いて地域資源をネットワーク的に保全・管理・運営することは、資源を総合的に有効活用できることにもつながるであろう。今後、地域資源を活用した持続可能な地域づくりを考える際にも博物館活動は一つの視点として重要であると考えられる。

国内における博物館活動と地域資源を生かした地域づくりに関する研究として、石川らの一自治体における市民活動をミュージアムの視点から捉え、その活動展開の条件に関して考察したもの⁽²⁾や、地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識からみた地域運営に関して分析したもの⁽³⁾、まちかど博物館に関わる住民の参加への意識形成に及ぼす要因を捉えたもの⁽⁴⁾、大泉によるエコミュージアムの展開過程に関して定量的に分析を行ったもの⁽⁵⁾、等が挙げられる。しかし、地域資源を用いた市民による博物館活動の展開状況と学習活動に関する研究はみられない。

以上のことから、本研究では、博物館活動の展開状況及び博物館活動を実施している住民の学習活動状況を把握し、地域資源を用いて博物館活動を行う際の課題及び問題点に関して考察することを目的とする。

2. 対象事例の選定

本研究では、調査対象事例として東京都墨田区「小さな博物館」運動を取り上げる。その理由としては、事業発足後21年が経っていることでその展開に対する経年変化や学習内容の多様性がみられると考えられること、地域資源を用いて博物館活動を実施している「小さな博物館」が地域内に点在していること、学習活動の対象となる資源も小道具等の展示物などだけではなく、地

域文化や技術など無形なものも含まれていること、などが挙げられる。

3. 研究の方法及び調査の方法

ミュージアム活動を行っている「小さな博物館」展開状況及び学習活動を把握するために、まず文献調査を行い、次に、現地調査及びヒヤリング調査を実施した。その結果から考察・分析を行った。ヒヤリング調査対象としては墨田区職員担当者⁶⁾及びミュージアム活動を実施している「小さな博物館」館長及び担当者（以下、博物館担当者）である。調査を実施した各「小さな博物館」の属性を表1に示す。

表1 墨田区「小さな博物館」一覧

博物館 No.	博物館名	開始年月日	入館者数 (2006年度) 単位：人	博物館担当者
1	軟式野球資料室	1986/6/27	200	博物館の運営をしている企業の総務部
2	鈴木木工博物館	1986/6/27		
3	セイコー時計資料館	2002/3/12	1500	専用解説員（企業のOB社員2名）
4	木造建築資料館	1986/11/1	280	主に館長
5	小林人形資料館	1986/6/27	120	館長の家族（館長の体調不良のため）
6	古伊万里資料館	1993/6/5	1000	専用解説員（パート）
7	江戸小紋博物館	1999/11/15	900	主に館長
8	羽子板資料館	1989/3/29	335	主に館長
9	合金鋳物博物館	1986/11/1	160	主に館長
10	藍染博物館	2000/5/20	418	主に館長（体験学習は家族も）
11	屏風博物館	1996/5/8	1100	主に館長
12	能面博物館	1986/11/1	150	主に館長
13	乾燥木材工芸資料館	1986/11/1	240	主に館長
14	プレーキ博物館	1999/3/28	400	専用解説員
15	べっ甲資料館	1990/3/15	600	主に館長、その家族
16	木彫資料館	1990/3/3	600	主に館長
17	相撲写真館	1986/6/27	2500	主に館長
18	足袋資料館	1989/10/1	5000	館長の家族（館長の体調不良のため）
19	桐の博物館	1996/10/10	1500	館長と従業員
20	金庫と鍵の博物館	1986/6/27	90	主に館長
21	建築道具・木組資料館	1986/11/1	300	主に館長
22	折箱博物館	2003/9/10	300	主に館長
23	袋物博物館	2003/3/27	400	副館長
24	NTTドコモ歴史展示 スクエア	2004/11/19	1954	館長と専属解説員
25	新藤ギャラリー	2004/11/29	480	専属解説員（3名）
26	江戸木目込人形博物館	2005/11/1	273	館長
27	新藤暦展示館	2006/7/21	875	専属解説員（3名）

現在実施している27館の博物館担当者に対し、電話より開館状況を確認し、そのうち、休館している1館（No. 2 鈴木木工博物館）を除く26館に対し、2007年3月から4月にかけて、直接訪問し、1博物館に対して1～2時間にわたってヒヤリング調査^[7]を実施した。また、墨田区職員担当者に対しても、2007年4月に直接訪問し、ヒヤリング調査を実施した。各博物館担当者及び墨田区担当職員に対する質問項目は表2に示す。

表2 質問項目

各博物館担当者	墨田区担当者
・博物館属性 ・開設の背景と経緯 ・運営体制 ・計画する際に重視したこと ・学習内容 ・学習を行う際の問題点、注意点及び考慮している点 ・民家及び個人店舗を博物館化することのメリット ・デメリット ・継続の意志の有無（理由など） ・改修（内容・費用） ・生活上での変化（行動や付き合いなど） ・補助金・助成金の有無 ・施設内容 ・利用者に関して ・広報活動について ・現在抱えている問題点／今後の意向／その他	・「小さな博物館」事業成立の背景と経緯 ・運営体制 ・補助金・助成金の有無 ・「小さな博物館」として認定する基準 ・「小さな博物館」の開館・廃館状況 ・各「小さな博物館」への来館者数 ・行政としての広報活動 ・過去及び現在における問題点 ・今後の意向／その他

4. 東京都墨田区の概況及び小さな博物館運動の経緯

(1) 東京都墨田区の概況

東京都墨田区は東京都東部に位置し、江東デルタ地帯^[8]の一部を占めており、西に隅田川、北から東にかけて綾瀬川、荒川、中川、さらに東から南には北十間川、東十間川、竪川が位置している。

江戸時代には、このような立地状況からも、江戸中心部からはずれており、武家屋敷と町人の町としての本所地区、そして江戸に野菜や魚などを供給する近郊農村である向島地区に分かれていた。また、産業においては、瓦焼き業、鋳物業、刷毛細工、足袋股引、釣道具、蠟燭や材木問屋、皮革産業や豊かな水を利用した染色産業等が活動していた。このように、江戸の最も重要な水路である隅田川における水上輸送を利用した商工業が発展していった。

しかし、明治維新以降、職人の町から工業の町へと変容していき、我が国有数の工業地帯になっていった。その理由としては、旧屋敷や農地などが安価で広い土地が工業用地として提供されたこと、縦横に発達した水路が格好の輸送路になったこと、武士の没落等で人的資源に余剰が生じたこと、また、都心という大消費地に近いなどが挙げられる。

その後、大正12年（1923年）、関東大震災による被害は甚大であり、この震災を契機に墨田の様相が一変する。被災者や工場の多くが他区や他県へ移るようになり、人口の減少がみられ、産業構造も雑貨系軽工業を中心としたものに変化していった。

その後、太平洋戦争での東京大空襲による大打撃を受け、ほぼ全域が焼土と化してしまった。そのような状況のまま終戦を迎え、戦後間もない昭和22年（1947年）、本所地区と向島地区が合併し、墨田区が誕生した。本所地区は設備投資がかからない軽工業を中心に発展していき、昭和20年中盤には朝鮮戦争特需によって活気を取り戻すようになった。

昭和30年代の高度経済成長期になると、墨田区の工場も新技術の導入等大きく成長していった。しかし、昭和42年（1967年）の住・工分離をうたった「首都圏整備基本計画」が決定され、市街地での工業立地が大幅に制限されるようになった。その後、昭和47年（1972年）には、「工業再配置促進法」が成立し、墨田区においても工場や企業の流出に拍車がかかるようになり、再び中小企業の町へとなっていった。

このような状況のもと、昭和54年3月、中小零細企業の振興に全面的に取り組むために、「墨田区中小企業振興基本条例」が制定された。これは、「1：具体的振興策の展開」「2：まちづくりへの取り組み」「3：イメージアップ施策の展開」「3：産業情報の収集・提供」を柱として実施されることになった。本研究で事例として取り扱った「小さな博物館」運動を含む3M運動は、このイメージアップ施策の一環として導入されたものである。

(2) 「小さな博物館」運動の経緯

「小さな博物館」運動は墨田区が中心となって進めている3M運動の一つである。3M運動とは、「1：小さな博物館（Museum）をつくっていく」、「2：技術を公開することによって技術普及をし、後継者を育成するマイスター（Meister）を育てていく」、「3：工房と店舗の機能を備えた、製造と販売が一体化したショッップ（Manufacturing Shop／旧 Model Shop）を増やすこと」という3つを柱として、地域の活性化を図ろうとするものである。それぞれの頭文字がMであるので3M運動と呼ばれている。3M運動は墨田区の産業PRとイメージアップ、地域活性化を図ることを目的とし、1984年に「墨田区産業振興会議 第三回ファッション会議」の座長である井上優氏により提案されたものである。3M運動の中でも「小さな博物館」運動は、そのような墨田区という地域に根ざした産業が産出した商品や工作機械、文献、資料等、墨田区を象徴する産業や文化に関係ある「もの」のコレクションを、民間の工場、作業場、民家などの一部を利用して展示し、墨田区の産業史、下町の生活史を「もの」で示すことで話題をつくり、墨田区を知ってもらい、訪れてもらう目的の運動である。

1985年に事業がスタートし、1986年に初の「小さな博物館」が7館オープンした。表4より、現在までに、のべ37館の「小さな博物館」がオープンしている。そのうち、22館が1990年までにオープンしている。1990年以前では年平均として4.4館オープンしているのに対し、1990年から後では、年平均として約0.94館である。このことから、「小さな博物館」事業実施直後が最も行政及び住民の関心が高かったと考えられる。

表3 3M運動及び「小さな博物館」運動の経緯

年月	3M運動の動き	「小さな博物館」運動の展開
1984年	「墨田区産業振興会議」第3回ファッション部会において、同会座長・井上氏が提案。目的：区内産業の活性化／イメージアップ、集客増加	
1985年	「3M運動」事業スタート (基準作り、手引書の発行、設置者募集など)	
1986年 6月 11月	「小さな博物館」スタート (「小さな博物館」整備補助要綱の制定、運動参加者への説明会開催)	「小さな博物館」7館オープン (軟式野球資料室、鈴木木工博物館、小林人形資料館、相撲写真資料館、金庫と鍵の博物館) 「小さな博物館」5館オープン (木造建築資料館、合金鋳物博物館、能面博物館、乾燥木材工芸資料館、建築道具・木組資料館)
1987年 5月	『「小さな博物館」運営補助制度」要綱の制定	「小さな博物館」2館オープン (はんこ資料館、NTTブリキのおもちゃ館)
1989年 2月 3月 10月 12月	「マイスター」「モデルショップ」スタート 初の「モデルショップ」2店オープン 初の「マイスター」14名認定	「小さな博物館」3館オープン (羽子板資料館、ライター博物館、石材博物館) 「小さな博物館」1館オープン(足袋資料館)
1990年 3月	「3Mフェア」の開催	「小さな博物館」4館オープン (べっ甲資料館、木彫資料館、伝統木彫資料館、硝子の本の資料館)
1993年 6月		「小さな博物館」1館オープン(古伊万里資料館)
1994年 10月		「小さな博物館」1館オープン(川崎編み物博物館)

1995年 1月		「小さな博物館」 1 館閉館（はんこ資料館）
12月		「小さな博物館」 1 館閉館（NTTブリキのおもちゃ館）
1996年 3月		「小さな博物館」 2 館閉館（千社札博物館、硝子の本の資料館）
5月		「小さな博物館」 1 館オープン（能面博物館）
8月		「小さな博物館」 1 館閉館（石材資料館）
10月		「小さな博物館」 1 館オープン（桐の博物館）
1998年 3月	「工房ショップ」事業スタート	「小さな博物館」 1 館閉館（川崎編み物博物館）
1999年 3月		「小さな博物館」 1 館オープン（ブレーキ博物館）
11月		「小さな博物館」 1 館オープン（江戸小紋博物館）
2000年 5月	「モデルショップ」事業を「工房ショップ」事業へ統合	「小さな博物館」 1 館オープン（藍染博物館）
2001年 2月		「小さな博物館」 1 館オープン（プジョーモトサイクル歴史博物館）
2002年 3月	「小さな博物館」「工房ショップ」を巡る「スタンプラリー」開催	「小さな博物館」 1 館オープン（セイコー時計資料館）
2003年 3月	昨年のラリーにクイズを加えた「クイズスタンプラリー」開催（4日間454名参加）	「小さな博物館」 1 館オープン（袋物博物館）
9月		「小さな博物館」 1 館オープン（折箱博物館）

2004年 11月	「噺家と歩くすみだの旅」開催。 博物館、工房ショップのほか、区内の 名所旧跡・銘品名店会をコースに加え、 若手噺家をガイドとして起用した（2 日間746名参加）	「小さな博物館」2館オープン （NTTドコモ歴史展示スクエア、新藤ギ ャラリー）
2005年 6月 11月	「墨田ものづくりと落語に親しむ旅」開 催。 区民ボランティアによるガイド、コー ス最後で若手噺家による落語を一席 （2日間454名参加）	「小さな博物館」1館閉館（伝統木彫資 料館） 「小さな博物館」1館オープン（江戸木 目込人形博物館）
2006年 7月	「秋のすみだ 粋と技の巡り歩き」開催。 区民観光ボランティアガイドによるガ イド、コース最後で若手噺家による落 語の他、江戸木目込人形の体験教室、 百花園見学など （11日間701名参加）	「小さな博物館」1館オープン（新藤暦 展示館） 「小さな博物館」1館閉館（プジョーモ トサイクル歴史博物館）

また、現在までオープンしたのべ37館うち10館が現在では閉館になっている。その開館時期及び閉館時期、閉館理由に関しては表4に示す。

開館期間に関しては、最長の「小さな博物館」で15年4ヶ月、最短では3年5ヶ月であった。閉館した「小さな博物館」の平均開館年数は9年1ヶ月である。また、廃館の理由としては、一身上の都合が最も多いが、店舗や企業の移転に伴う廃館、運営していた企業の倒産、また、「硝子の本の博物館」のように、工場と展示スペースが違う空間に位置していたため、「小さな博物館」開館日には博物館担当者が工場と展示スペースとの行き来を繰り返していた。このことが業務に支障をきたすことになり、廃館につながった（墨田区職員担当者、「小さな博物館」館長のヒヤリングより）。運営団体と「小さな博物館」が違う空間に位置している場合、今後もこのような問題が生じてくるだろうと考えられる。

表 4 廃館した「小さな博物館」の廃館理由及び開館期間

博物館名	廃館 の理由	開館期間
はんこ資料館	一身上の都合	約 7 年 9 ヶ月
N T Tブリキのおもちゃ館	運営団体の移転	約 7 年 8 ヶ月
千社札博物館	一身上の都合	約 9 年 9 ヶ月
ライター博物館	一身上の都合	約13年 7 ヶ月
伝統木彫資料館	一身上の都合	約15年 3 ヶ月
タキナミグラス博物館	運営団体の撤退（運営企業の倒産）	約15年 4 ヶ月
石材資料館	一身上の都合	約 7 年 5 ヶ月
硝子の本の博物館	人身確保が困難になったため（工場と別に展示スペースがあったため、解説をするためには常時人員が必須であった）	約 6 年
川島編み物博物館	一身上の都合	約 3 年 5 ヶ月
ブジョーモトサイクル 歴史博物館	区外への店舗移動のため	約 5 年 6 ヶ月

(3) 「小さな博物館」開館までの背景及び目的

「小さな博物館」が開館するきっかけとしては、応募したもの、行政から要請があったもの、両国駅北口再開発事業⁹⁾での新ビル建設に伴う墨田区との地域貢献に関する協定のため、以上 3 つに大きく分けられる（表 5）。

自ら応募した「小さな博物館」は26館中13館と最も多い。そのうち、2 館（No. 9、26）は、以前から 3 M 運動や伝統工芸保存会などに参加しており、次のステップとして「小さな博物館」運動に参加するなどの段階を経たものであった。また、知り合いや従業員の働きかけがきっかけであったもの（No. 5、6、7）、既に開館していた他の「小さな博物館」からの影響（No.16、23、27）、が挙げられた。また、その他としては、組合で話が持ち上がり、組合の代表として応募したもの（No. 4）、町内会での地域活性化策として、その代表として応募したもの（No.14）、区報などを通じて、事業に賛同したもの（No. 8）、なども挙げられた。

また、開館にあたって行政から要請を受け、それに対応するかたちで開館していたのは11館であった（No. 1、3、10、11、12、13、15、17、18、19、20）。そのうち、2 館（No. 1、3）は「小さな博物館」となる前に、もともと企業系資料館として運営されており、「小さな博物館」運動の発足をきっかけに要請されたもの（No. 1）、資料館開館の数年後に要請されたもの（No. 3）である。

両国駅北口地区再開発事業に伴う行政との協定のために、新ビル建設に伴い建築物内に開館した「小さな博物館」は 2 館である（No.24、27）。

開館年数が高い「小さな博物館」では、行政からの要請をきっかけに開館したものが多い。これらの「小さな博物館」の活動が時間的变化を経て、ある程度地域住民に認知度が高まった後に

住民サイドからも自主的に応募するという展開がみられた。また、再開発事業に伴い、ある程度大規模の企業が地域住民への空間提供を行政から要求された場合でも、同じ運営団体が自主的に別の「小さな博物館」として応募するという展開もみられた（No.27）。このように他の「小さな博物館」の実績が他の住民達にも大きな影響を与えていると考えられる。

また、開館の目的としては、「伝統技術を伝えたい」、というものが最も多く（No. 4、5、8、9、10、11、12）、それに次いで「業界のイメージアップを図りたい」（No.13、21、22、23、26）、「運営企業のイメージアップを図りたい」（No. 1、3、24、27）、「集客及び物販の向上のため」（No. 7、19、）などが挙げられた。文化伝統工芸系の「小さな博物館」では、道具や作品の展示や解説など通じて伝統技術を知ってもらいたい、という目的が多く挙げられるが、その一方で、集客及び物販を目的としたのも同じ伝統工芸系の「小さな博物館」である（No. 7、19）。ともすれば埋もれてしまいがちな伝統工芸であるが、「小さな博物館」に参加するようになって展示販売等の実施等、かつての営業形態を変えて今までの営業不振の状態を打開したいという理由もあると考えられる。

表5 開館のきっかけ

自主的な応募	他の3M運動に参加し、その次のステップとしての参加や、組合で運動に参加していたが組合の解散に伴い個人としての運動に参加する等の段階的な参加
	以前から情報を得ていた知り合いや従業員の働きかけ
	他の「小さな博物館」からの影響
	組合を代表としての参加
	町会の活性化策としての参加
	区報等を通じた応募
区の要請	
再開発事業に伴う区との協定	

5. 学習活動に関して

表6より、学習活動の内容に関しては、道具や作品等の「収集」、それらを一般に公開する「展示」、もしくは自社製品等の「展示物販売」、そのような展示や技術等に対する博物館担当者による「解説」、実際の現場による「技術見学」、職人の指導を受ける「技術体験」とし、以上、「収集」「展示」「展示物販売」「技術見学」「技術体験」の5つに分けた。

全ての博物館が共通して実施していたのは「収集」「展示」「解説」であった。また、「収集」「展示」「解説」の3活動だけを実施している「小さな博物館」は26館中12館であった。これらは工場や作業場が「小さな博物館」と違う場所に位置していること、展示物が組合等からの借り入れ品であること、担当者である職人が引退したこと、など技術を実際に見学できない状況であった。また、「収集」「展示」「解説」に加え「技術体験」を行っている全ての「小さな博物館」は「技術見学」

も実施していた。また、現在実施している「小さな博物館」の中で、かつて「技術体験」を2館実施していたが、両館とも館長の体調不良に伴い現在は実施していない(No. 5、18)。「収集」「展示」「解説」「技術見学」を実施していた「小さな博物館」は1館のみ(No. 4)であった。しかし、この「小さな博物館」では、定期的な「技術見学」の実施はしておらず、来訪時に現場で作業をしていれば見学ができる状況であった。また、「展示販売」を実施していた博物館は26館中8館全てが伝統技術系の「小さな博物館」であった。この「小さな博物館」運動によって広報活動もでき、また、問屋などを介さず直接販売することでコスト削減もでき、経営にも好影響を与えていると考えられる。

(1) 展示活動に関して

展示内容としては、代々の作品や自らの作品や自社製品のみを展示しているのは8館であった。また、自ら所有する収集物以外に関連ある道具や製品等を組合等から貸与され展示している「小さな博物館」は10館であった。「組合が貸してくれなければ、こんな風には開けなかったんじゃないかしら。いろいろお願いしたのよ(No.23)」など、組合等の協力によって成り立っている「小さな博物館」もある。その他としては、趣味のコレクションの展示である(No. 5、12)。「うちはね異色なの。他の地場産業の博物館に申し訳なくて。古伊万里なんて墨田と全く関係ないからね。だから、せめて、墨田の焼き物(墨田焼き)を10年前から集めて展示しているの(No. 6)」というように、趣味のコレクションを展示が中心ではあるが、「小さな博物館」運動を通じて、地域文化に対する興味を抱く結果になったと考えられる。

(2) 解説活動に関して

全ての「小さな博物館」で「解説」を行っているが、同時に多数の来館者に対応できない場合もあり、そのために予約制を採用している「小さな博物館」もある。ただ全ての来館者に対し同じ説明をするのではなく、来館者のニーズに合わせ、その都度解説を変えていくという考慮も挙げられた(No. 3、26、27)。また、自らの伝統工芸の解説だけではなく、展示物の年代とその歴史背景、自らの戦争体験などを来館者に伝えている「小さな博物館」もあった(No. 8)。ニーズに合った丁寧な解説や職人に話を直に聞く事ができるといった従前の博物館とは違う側面を出すことによって、「小さな博物館」の独自性を向上させていると考えられる。

(3) 技術見学・体験活動に関して

もの作り体験ができる「技術体験」に関しては、実施している「小さな博物館」全てにおいて、来館者にももの作りに興味を持てるよう考案していた。例えば、年齢に合わせて難易度を変化させる(No.11)、同じ染め物でも他の来館者とは違う染め上がりになるように考慮している(No.10)等、各「小さな博物館」で工夫がみられた。それによってリピーターの増加、製造過程を実際体験する事で自社製品を購入する来館者の増加もみられた。

表6 各「小さな博物館」の学習内容

博物館 No.	学習内容	学習内容の種類
1	軟式野球ボールの歴史、軟式野球ボール・バット・グローブ製造工程、軟式野球全国大会に関する資料、オリンピック関連の品物を展示・解説。	収集・展示・解説
3	世界の時計・自社時計・国産他社の時計（収蔵、文献（6000点）・資料（創業100周年を期に収集）の展示・解説。資料の公開。	収集・展示・解説・技術見学
4	カンナ・ノミ・ノコギリ等の道具、昔の図面を展示をし、それに対する解説。仕事とのタイミング次第で見学することも可能。	収集・展示・解説・技術見学
5	江戸時代から伝わる人形の工程、代々の作品（市松人形等）を展示、解説。（かつては技術見学もしていた）	収集・展示・解説 （以前は、技術見学も）
6	趣味で収集した伊万里、古家具、絵はがきの展示・解説。	収集・展示・解説
7	自社製品（江戸小紋染め）を中心に、江戸小紋染めの製造工程、江戸時代からの型等の展示・解説・江戸小紋染めを体験できる（実費負担）。仕事場の見学もある。展示品の販売。	収集・展示・解説・技術見学・技術体験・展示販売
8	幕末・明治・大正・昭和の収集した羽子板、自社製品の展示・解説。展示品の販売。年2回入れ替え	収集・展示・解説・展示販売
9	合金鋳物の製造工程やかつての組合が所有していた道具、型、材料、製品等の展示・解説。技術体験（ベルトのバックル作り）	収集・展示・解説・技術見学・技術体験
10	自社による藍染め作品、道具、先代の作品、製造工程の展示・解説。藍染めハンカチ作りを体験できる（実費負担）。仕事場の見学。	収集・展示・解説・技術見学・技術体験
11	自社で製造した屏風を中心に、歴代の屏、風他の博物館とのコラボレーション作品、製造工程の展示・解説。からくり屏風作りを体験学習できる（実費負担）。仕事とのタイミング次第で見学もする事も可能。展示物の販売。	収集・展示・解説・技術見学・技術体験・展示販売
12	自らが製作した能面の展示（趣味で作っている、本業は建築業）、製造工程の展示・解説。	収集・展示・解説・技術見学
13	自社が製作した木工作品を中心に、道具、材料などの展示・解説。木工パズル作りを体験できる。展示品の販売。	収集・展示・解説・技術見学・展示販売
14	自社製品（プレーキ部品）、収集した他社製品、組合の製品、自動車のシュミレーターの展示・解説。	収集・展示・解説
15	自社製品（べっ甲細工）を中心に、歴代の作品、収集したもの、自社製品の展示・解説。べっ甲のペンダントトップ作りを体験できる（実費負担）。展示物の販売。	収集・展示・解説・技術見学・展示販売
16	自社製品（木彫細工）を中心に、歴代の作品の展示・解説。コースター作りを体験できる（実費負担）。展示物の販売。	収集・展示・解説・技術見学・技術見学・展示販売
17	先代及び自身が撮った相撲に関する写真、知人から譲り受けた品々を展示・解説。	収集・展示・解説

18	自社製品（足袋）を中心に、歴代の製品、道具、製造工程の展示・解説。展示物の販売。（かつては技術見学もしていた）	収集・展示・解説・展示販売（以前は、技術見学も）
19	収集したもの（数百年前の桐製品等）、道具（開館を期に多くを収集）、自社製品（桐製品）の展示・解説。展示物の販売。	収集・展示・解説・展示販売
20	先代が収集した金庫や鍵（仕事関連）の展示・解説。	収集・展示・解説
21	組合や知り合いの道具（ノコギリ・カンナ・墨壺等）や木組みや木造建築物の模型（和風・洋風）などの展示・解説。	収集・展示・解説
22	組合の製品（日本の伝統的食品容器である折箱・木箱等）、自社製品（折箱等）の展示・解説。	収集・展示・解説
23	組合の収集品（江戸時代の小銭入れや札入れ）、自社製品（袋物）、袋物の歴史の展示・解説。別室にて一部販売。	収集・展示・解説・展示販売
24	自社製品（移動通信機）の歴史の展示・解説。	収集・展示・解説
25	収集したもの（世界最古の印刷物や1870年代米産印刷機等）、印刷工程などの展示・解説。	収集・展示・解説
26	自社製品（江戸木目込人形）を中心に、歴代の製品の展示・解説。工房と展示スペースが同じなので技術見学もできる。簡単な人形作りが体験できる（実費負担）。	収集・展示・解説・技術見学・技術体験
27	世界のカレンダーと自社製品（カレンダー）の歴史、日本の暦の歴史に関する展示・解説。	収集・展示・解説

「技術体験」を実施している「小さな博物館」の全てが仕事場の一部もしくは全面的に開放して、「技術見学」を実施していた。「仕事に支障がなければ見たっていいよ(No.26)」というように、仕事を最優先し、その合間に見学を実施している。このことより長期的に「小さな博物館」を続けていくためにも、余力の範囲で実施していると考えられる。

（4）学習活動を通じて得たこと

また、逆に、このような学習活動を通じて、「小さな博物館」サイドとして得たこととして、世間のニーズを直接聞くことができ営業や製品に生かしてきた（No. 1、11、15、16、19）、職人の世界だけではなく様々な世代や人との交流ができた（No. 5、10、15、20、23）、解説をするために自分たちの仕事についてより深い知識を得ようと常に勉強を欠かさなくなった（No. 3、14、23、24、26）、「展示」や「技術見学」等の学習活動を通じて自らを省み、原点に戻る気持ちになり、仕事に対し誇りを持てるようになった（No. 4、24、26）、来館者から周辺の店舗や隠れた名所等を紹介するために情報を得るようになった（No.23）等が挙げられた。このことから、様々な形で博物館担当者にも影響を与えていることがわかる。ただ「教える」といったワンウェイ的な学習活動ではなく、教え教えられる、学んでいくというツーウェイ的な学習活動になっていることがわかる。また、この学習活動を通じて自らの仕事に対する誇りや地域に対する誇りなども増加していると考えられる。

6. 過去及び現在における問題点及び今後の意向

(1) 過去及び現在における問題点

問題点として、まず後継者に関するものが挙げられた。伝統工芸系の「小さな博物館」の館長の多くは高齢者であるためこのような問題が生じてくるのであると考えられる。実際、後継者のいない7館が継続していく意思はなく、そのうち2館(No. 5、18)の「小さな博物館」の館長が、現在体調不良であるため、その担当を配偶者等家族に依存しており、両館とも、今後数年で廃館の予定である。しかし、後継者がいる「小さな博物館」は9館あり、「せがれがいなければこういうなの(「小さな博物館」)はしなかったね。私の代までなら前のままでいいよ。(No. 7)」という意見もあることから、次世代への掛け橋の一つとして「小さな博物館」運動に参加していると考えられる。しかし、残りの「小さな博物館」からは、子供の意思次第という意見が挙げられた。

また、一般に公開していることから、見学者のマナーの問題も3館から挙げられた。そのうち2館は子供のいたずらで展示物が散乱する被害(No. 4、5)、残りの1館は展示物が盗難の被害に遭っていた(No.15)。それへの対応策として、No. 4では改修の際にガラスケースを設置し、一般の訪問者が手を触れないようにする等が挙げられた。

また、他の問題点として開館日には誰かが常駐しなければならないという事も挙げられた(No. 4、6、19、20)。ほぼ無償で「小さな博物館」の運営をしているために、どうしても仕事を優先しなくてはならず、また、常駐するには人件費がかかってしまう等、問題は容易に解消できないのが現状である。また、「小さな博物館」は民家や工場である場合が多いため、スペースの狭い「小さな博物館」では多数の来館者があってもそれに対応しきれないこともあり、そのため受け入れを断ってしまうこともある(No.26)、展示スペースを設けたため仕事場が狭くなり、仕事に影響がでている(No.22)等の物理的な問題も挙げられた。

(2) 今後の意向

今後の意向としては、現状維持でいいという意見が7館と最も多く(No. 5、7、8、12、13、21)、それに次いで5館が学習内容の充実をしていきたいと挙げた(No. 1、3、4、24、26)。また、他の「小さな博物館」と連携してよりネットワーク化をはかりたいという意向(No.11、16)、「小さな博物館」が持つ空間の多面的活用(No.23)なども挙げられた。このことから、開館年数の長い「小さな博物館」は伝統文化を守り、現状維持を望んでいることに対して、展示物を増やす等の学習内容の充実や資源や空間の多面的活用等を挙げている博物館は比較的年数が短い。このことから、日々の積み重ねを大事にしながら「小さな博物館」運営を行っており、それは経験に基づくものであると言えよう。また、年数が短い「小さな博物館」でも、開館年数の長い「小さな博物館」を参考にした上で、独自性のある「小さな博物館」として運営しているものも多いため、より工夫していこうとする姿勢が伺われる。

7. おわりに

東京都墨田区「小さな博物館」運動は着実にその館数を伸ばしており、その発展の背景には行政の大きな働きかけとそれに対する住民の意向が一致したことも挙げられる。また、事業初期に開館した「小さな博物館」の多くもいまだに継続しており、新規の「小さな博物館」にも大きな影響を与えていることがわかった。このことから、ある程度年数を経て実績を積むことによって地域外はもとより地域内の住民が資源を見直すようになり、新たなネットワークが生じていると考えられる。

所有する資源を対外的に「展示」や「解説」することで、地域や資源に対する自主的な学習もみられ、それに伴って資源に関するものを「収集」することに対しても精力的な「小さな博物館」も多くみられた。また、「もの」の展示や解説だけでなく、「もの」ができるまでの過程の見学や体験を通して伝統文化や技術に触れ合わせようと工夫している「小さな博物館」も存在することからも、訪問者がそれを身近な存在として捉え、後世に継承していく一つの手段であると考えられる。しかし、「小さな博物館」運動は住民がほぼボランティアで行っているために、経済面や安全管理面での問題や、人員がいないと開館できないなどの問題点も生じており、今後、このような運動を広めていくためには、対応策が必要になってくると考えられる。

市民が所有する資源を用いて博物館活動を行うことは、地域文化に対する発展的学習を自主的に促すことができ、また、それを維持することで自らの資源に誇りを持てる機会になりうる。このことが持続的な地域づくりにも繋がっていき、地域の資源である歴史や文化を次世代へ伝えていくきっかけになると思われる。

また、本研究をすすめるにあたり、東京都墨田区産業経済課及び各「小さな博物館」担当の方々には、ご多忙な中、調査のご協力及びご教示を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

【注】

- (1) 伊藤寿郎によると、博物館の定義は「国連教育・科学・文化機関 UNESCOの定義」「国際博物館会議ICOMの定義」「日本における博物館法の定義」があるが、共通して主張している点として「調査・研究」「収集・保管」「公開・教育」があり、これら目的全てを満たすことが博物館であるために重要であると述べている（伊藤寿郎 1993『市民の中の博物館』吉川弘文館 p.8-11）
- (2) 石川宏之・小林重敬 2001「ミュージアム活動の視点から見た市民活動の条件に関する研究－神奈川県川崎市を事例として－」第36回日本都市計画学会学術論文集 pp.13-18
- (3) 石川宏之 2002「地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識から見た地域資源に関する考察」日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要 第6号 日本ミュージアム学会 pp.15-21
- (4) 近藤隆二郎・盛岡通 1994「ミニ博物館事業における「館長」意識の形成過程に関する研究－墨田区『小さな博物館』と伊勢市『まちかど博物館』－」第29回日本都市計画学会学術論文

集 pp.703-708

- (5) 大泉剛 1999「北上川流域圏における早池峰エコミュージアムの展開手法に関する基礎研究」岩手大学学位論文
- (6) 東京都墨田区商工部産業経済課の3M運動担当者にヒヤリング調査を行った。
- (7) 各「小さな博物館」担当者には、可能な限り展示見学及びその解説、技術見学・体験をお願いし、その学習内容を記録した。
- (8) 荒川と隅田川にはさまれた、墨田区、江東区、江戸川区にまたがる地域のこと。
- (9) 1992年に東京都墨田区両国駅北口地区再開発地区計画の都市計画決定がされた。再開発地区計画区域面積14.9ha、再開発地区整備計画区域面積2.5haである。この事業により、同地区には1993年に江戸東京博物館、2000年に国際ファッションセンター、2004年にNTTビルがオープンした。また、2000年に都営大江戸線両国駅が開業した。

引用・参考文献

- ・伊藤寿朗 1993『市民の中の博物館』吉川弘文館
- ・菅井薫 2006「博物館活動における市民の専門性と役割ー市民との連携活動のモデル化と分析ー」博物館学雑誌31巻2号 全日本博物館学会 pp.37-59
- ・墨田区商工部産業経済課 1992「新しいすみだ3Mキャンペーンの歩み」
- ・武蔵野大学社会学部社会学科 2002「工房ネットワーク都市を目指して 墨田区『小さな博物館』運動の背景」